



## 慣用表現・変則的表現から見える英語の姿

住吉誠・鈴木亨・西村義樹 編

家入葉子・五十嵐海理・内田聖二・後藤一章・  
小早川 暁・柴崎礼士郎・鈴木亨・住吉 誠・都築雅子・  
西村義樹・平沢慎也・八木克正 著／

A5判 264頁 本体3500円

2019.9 最新刊

一般化からこぼれ落ちてしまうような「慣用」「変則」に焦点を当てることで、英語の創造的側面・多様性を浮かび上がらせることができる。この考えを共通項として、認知言語学、英語史、コーパス言語学、語用論、語彙意味論、語法文法研究といった分野の研究者が、英語の興味深い現象を縦横に論じる。本書は、英語の持つ独自の慣用・不規則への志向性を考察し、従来の言語観を問い直すものである。



## イエスペルセン 近代英語文法 II

Otto Jespersen 著／中村 捷 訳述

A5判 360頁 本体4200円

2019.9 最新刊

オットー・イエスペルセン著『近代英語文法』(MEG)の第II巻の内容を紹介し若干の論評を加えた。MEGは近代英語の文法の体系化を試みたものであり、近代英語に関する記述文法の最高峰である。近代英語の実体を簡潔に網羅的に記述することを目的とし、それに必要な限りにおいて史的变化にも言及するという方法をとっている。本書の特徴は理論と事実の有機的結合と用例の豊富さにある。近代英語の集大成である。



開拓社 言語・文化選書 82

## 続・動詞の意味を分解する 変化の尺度・目的動詞・他動性

出水孝典 著／四六判 208頁 本体2000円

2019.10 最新刊

Beth Levin と Malka Rappaport Hovav による、事象スキーマに基づいて動詞の語彙意味表示を作り出す理論は、1998年の登場以来すでに20年以上が経過し、これまでに新たな精緻化が行われました。また、理論に対する批判と代替案の提案もありました。さらに、関連づけると興味深い他の研究もあります。それらを、前著『動詞の意味を分解する』と同様、さまざまな具体例を挙げながら、平易に解説しています。



開拓社 言語・文化選書 83

## 事態の捉え方と述語のかたち 英語から見た日本語

黒滝真理子 著／四六判 208頁 本体2000円

2019.10 最新刊

「ことば」は自然科学のように常に理路整然と説明できるとは限りません。それは「ひと」が関わっているからです。〈話す主体〉である「ひと」が推論し意味を探り、そこにある「心の語り」、つまり心の働きを投影するのがモダリティです。本書は、日英語のモダリティを通して、言語の背後にある認知的スタンスの普遍性と相対性の陰影に切り込んでいきます。この「新モダリティ論」を是非ご堪能ください。



一歩進める英語学習・研究ブックス

## 一例とイメージで学ぶ 感覚英文法・語法講義

今井隆夫 著／四六判 264頁 本体1900円

2019.10 最新刊

日本語と英語では、事物に対するカテゴリー化の仕方が異なるため、訳語による学習で英語表現の理解が可能なのは、カテゴリーが重なる部分だけです。カテゴリー化の根底にある、人の持つ認知能力(比較する、関連付ける、一般化・具体化する)にフレンドリーな説明により、訳語と文法用語ではなく、英語表現が表すイメージを理解することで英語コミュニケーション力の向上に役立ちます。



一歩進める英語学習・研究ブックス

## 「英語耳」を鍛え「英語舌」を養う

今井邦彦 著／A5判 200頁 本体2200円

2019.11 最新刊

英語は音の脱落の多い言語なので、I should have thought so. が「アシュトフソーツォウ」のように発音されることが少なくありません。本書で「脱落の規則」を学べば、上例の文の聞き取りが容易になり、脱落を含む英語らしい英語の発音が可能になります。同じ文をイントネーションの変化で全く別の意味に変える術もこの本で学んでください。



英語教師力アップシリーズ ⑥

## 授業力アップのための 英語教師 自己啓発マニュアル

佐野富士子・小田寛人 編／A5判 312頁 本体3200円

2019.11 最新刊

生徒の英語力向上をさらに押し進めるよう求められるにつれ、英語教師としての英語力、知識、技能をどう高めたらよいか、そのような疑問を持った時に役立つ情報が満載の一冊である。留学するには、調査・研究を行うには、アンケートやテストの結果をどう分析し、どこへどう発表するのか、使える英語力を育成するにはどのような授業を行えばよいか、国際業務はどのように進めたらよいかなど、多岐に渡るトピックを扱っている。



## 日・英語の発想と論理 認知モードの対照分析

山梨正明 著／A5判 288頁 本体3500円

2019.11 近刊

認知言語学の枠組みに基づく日・英語の対照分析により、両言語の形式・意味・運用の諸相を体系的に考察する。また、言葉の発現の基盤となる人間の認知能力に基づき、日・英語を特徴づける母語話者の発想と論理のメカニズムを実証的に明らかにする。言語学の研究分野に新たな知見を提示するだけでなく、言語教育、言語文化論、比較文体論、翻訳論、言語類型論等の関連分野にも重要な知見を提供する研究書である。



## 多義動詞分析の新展開と 日本語教育への応用

プラシャント=パルデシ・初山洋介・砂川有里子・  
今井新悟・今村泰也 編／A5判 276頁 本体3600円

2019.11 近刊

日本語の基本動詞はほとんどが多数の語義を有する多義動詞である。そのため、基本動詞は、日本語学習者の習得の難関となるだけでなく、日本語教師にとっても教育の難関として立ちはだかる。本論文集は、上級レベルの日本語学習者と日本語教師のための「基本動詞ハンドブック」の作成を通して、最前線の研究者によって行われた多義動詞の分析と外国語との対照研究、およびそれらの日本語教育への応用に関する成果と課題の集大成である。



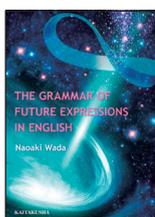
「英文法大事典」シリーズ第3巻

## 名詞と名詞句

寺田 寛・中川直志・柳朋宏・茨木正志郎 訳／  
A5判 552頁 本体5200円

2019.11 近刊

本巻『名詞と名詞句』は、*The Cambridge Grammar of the English Language* 第5章の翻訳である。一口に名詞といっても、本巻には代名詞や数量詞も含まれる。名詞が単独で名詞句の主要部になる場合もあれば、名詞が主語や目的語をとっている場合もある。名詞句の内部に現れる要素として、形容詞などの修飾要素や名詞を限定するはたらきをもつ限定詞や、そのほかの名詞句内部に現れるあらゆる要素がある。本巻はこれらの要素の性質やその語順を網羅的に記述・解説する。



## The Grammar of Future Expressions in English

和田尚明 著／A5判 上製 444頁 本体9000円

2019.11 近刊

時制現象の包括的分析を謳う著者が、2001年出版の自身の著書の中で提案した時制理論を修正・発展させたモデルに、文発語の観点から捉えたモダリティ・心的態度に関する理論と、近年、廣瀬幸生教授によって提案された文法と語用論の関係に関する一般的な言語使用モデルを融合させることで、より包括的な説明的モデルを提示する。このモデルを用いることで、時制とモダリティの接点でもある未来表現6種類の体系的分析を行う。



## コーパスからわかる 言語変化・変異と言語理論 2

小川芳樹 編／A5判 上製 440頁 本体6800円

2019.11 近刊

2016年に刊行された同タイトルの論文集の第2弾。変化するのは言語の本質であるが、現在、世界に数千あるとも言われる多様な言語が存在するのも変化の結果である。しかし、個々の言語理論が、その変化・変異のメカニズムの全容を解明するには限界がある。だからこそ、形態論・統語論・意味論・社会言語学・歴史言語学・方言研究・言語獲得・実験心理学などの諸分野の研究者がその最新の研究成果を持ち寄る場が、いまこそ必要なのである。

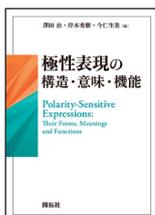


## 言語における インターフェイス

西原哲雄・都田青子・中村浩一郎・米倉よう子・  
田中真一 編／A5判 304頁 本体3800円

2019.11 近刊

本書は、言語研究におけるインターフェイスに焦点を当てた論文集である。「統語論」「音韻論・音声学」「形態論」「意味論」「外国語教育・言語習得」の5分野を一方の軸とし、他分野とのインターフェイスを分析した最新の論考が20編収録されている。対象とする言語、現象ともに多岐に渡り、充実した内容となっている。英語学、日本語学、言語学の研究者、また、大学院生、学部生など、幅広い読者を対象としている。



## 極性表現の 構造・意味・機能

澤田 治・岸本秀樹・今仁生美 編／  
A5判 400頁 本体4800円

2019.11 近刊

極性表現の構造、意味、機能についての第一線の研究者による論文を収録。極性についての先行研究を踏まえた上で、統語論、意味論、語用論、歴史、言語獲得、コーパス等、様々な観点から、否定極性現象のみならず、肯定極性現象をも含めた極性現象の最新の分析が展開されている。編者による極性研究の概説も含まれ、専門家は言うに及ばず、初学者にも、極性現象の研究をするための必携書となっている。



## 動的語用論の 構築へ向けて 第1巻

田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝 編／  
A5判 272頁 本体3600円

2019.11 近刊

ことばは今この瞬間に動いており、獲得され、歴史的に変化し、マイクロ、マクロに渡って変異する。ことばはわれわれの生態系、知識や認知、さらに社会生活からどのような影響を受け動いているのか。本書は「共通基盤化」「歴史語用論」「会話分析」「類型論」「認知言語学」などの分野を横断し、理論と実証を経て、この動的な性質を解明する。「動的語用論の構築へ向けて」(第1巻)は、新たな語用論の領域への挑戦である。